

# 物語に結像しない「女」 ——大石千代子『ベンゲット移民』をめぐる

金子聖奈

キーワード: 大石千代子、国民、からゆきさん、フィリピン、移民

## 1. 「国民」と「女」のダブルバインド

「人といふなあ、皆男の事ぞう。女は人であつた例がねえや」——女は人ではない、とまで言い放つこの言葉は、大石千代子の長編作品『ベンゲット移民』（岡倉書房、1939年9月）にて、フィリピンで出稼ぎに従事した日本人の男性移民の言葉として現れる。これは「女」が「人」として扱われていない、と批判をこめているようにも思われるが、しかし、この物語における女性のありようは確かに「人」ではない。それだけでなく、物語の筋も、日本人の男性移民が「日本人」や「国民」として立派であったことを前景化するものである。

この『ベンゲット移民』の作者である大石千代子は、これまで「ナショナリズム」に無自覚な作家として積極的に評価されてこなかった。例えば川崎賢子は当作品について「移民たちの生死は、たとえ国家の庇護をはなれた異邦にあっても（いやだからこそか）、「日本民族」として強い凝縮力をもち、そのナショナリズムゆえに尊いものとして、置き直される」<sup>1</sup>と述べ、川村湊は、大石自身が「『移民』をめぐる言説に付き物のナショナリズム、エスノセントリズムについて日本文学者として認識し、内省しているとは思われない」<sup>2</sup>と批判的に述べた。本稿は、このように「ナショナリズム」に追随した作家、ないし作品として見做されてきた大石千代子の『ベンゲット移民』の解釈を再考するものである。ここでは、竹村和子の「国の内外で女を二分することによって、「国民」であることと「女」であることのジレンマに、国内の女を立たせる」<sup>3</sup>という指摘を視座とする。その上で本稿では、南進論の高揚と家父長的社会において、「国民」かつ「女」であることによるダブルバインドを抱え込んだ大石にとって、どのような表現が可能であったのかを明らかにする。

「ナショナリズム」的と評される小説『ベンゲット移民』は、大石千代子の第一刊行物であり、第九回芥川賞予選候補となった<sup>4</sup>。北九州の漁村で生活していた貞吉（19歳）は、移民会社の斡旋に飛びついて、船内で知り合った政三、安中、高部らとともに「明治卅六年十月十六日」にマニラに入港する。彼らが到着してみれば「比律賓人やアメリカ人達」から侮蔑の目を向けられ、「日本人の誇」を傷つけられたと齒噛みする。その悔しさや「故郷に錦を飾る」ためにベンゲットの危険な工事に向かうが、劣悪な労働環境で赤痢が流行り、同じ

1 川崎賢子『書く女 読む女 女系読書案内』白水社、2003年6月、177頁

2 川村湊「大阪という植民地 織田作之助論」、『戦後』という制度——戦後社会の「起源」を求めて』インパクト出版会、2002年3月、160-161頁

3 竹村和子『フェミニズム』岩波書店、2000年10月、93頁

4 『ベンゲット移民』の内容・表現の一部を改稿・加筆したものが戦後に『人柱』（新流社、1960年8月）、『ベンゲット道路』（日本週報社、1963年10月）として刊行された。戦後の『人柱』と『ベンゲット道路』は同じ紙型を使ったらしく、本文・組版は同じで、『ベンゲット移民』と、『人柱』『ベンゲット道路』のあらすじもほぼ同じである。この改稿についても検討する必要があるが、これは別稿にゆずる。

天幕で寝起きしていた富次郎があっさりと死んでしまう。また、そのような状況に耐えかねてベンゲットから逃げ出す者も現れる。さらに移民会社の監督たちが貞吉たちの給料をピンはねしていたことがわかり、安中を中心に労働移民たちはストライキをしていく。貞吉も労働者が「虫けらの様に」死んでいくことに絶望し、工事を投げ出して脱走する。しかし、逃走した先には、大勢の仲間が「野垂れ死」していた。貞吉は「生き残つた者達で、お前らの菩提をとむらふてやる」と約束し、それを果たすためベンゲットへと戻って行く。

早瀬晋三『「ベンゲット移民」の虚像と実像』<sup>5</sup>を紐解けば、「外交文書のなかに、「日本人によって完成されたベンゲット道路」の記録も「日本人七〇〇人の人柱」という記述もない」とあり、作品に描かれたようなフィリピン・ベンゲット道路工事における日本人労働者の優秀さを立証することはできない。それにも拘わらず、日本人の力によってこそ難工事が完成したという「伝説」が、1930年代後半の南進論の高揚のなかで定着した。この「伝説」に寄与したことが、大石の作品が批判される理由であると言える。

ただし、「国民」として創作をするときの作家の主体性については慎重に検討する必要がある。例えば菅聡子は、樋口一葉について「国家の構成のなかにありつつ、第二級国民としての女性を捉えたからこそ」「国家の構造の内部で「女子」であること存在矛盾を描き得た」<sup>6</sup>と述べ、女性作家としての樋口一葉の「国民」としてのありようと一葉の和歌の言葉との連関を分析している。菅は「明治近代」における女性作家の「国民」としての側面を明らかにしたが、これについては、アジア太平洋戦争から戦後に至るまでなお問題化されるべきである。

大石千代子に関しては近年再評価が試みられるようになってきている。大石の作品のほとんどがブラジルかフィリピンを舞台としたり、「移民」をテーマとしたりするために、好意的な評価では「海外における日本人の姿を描いた」<sup>7</sup>、「女性には珍しい硬質の素材を、スケール大きく描いた異色の社会派作家」<sup>8</sup>と位置づけられてきた。また尾形明子は、長谷川時雨主宰の女性作家が集った雑誌『輝ク』における大石について、「海外への無邪気な憧れ、見知らぬ国への好奇心、さらには閉ざされた状況からの脱出の思い」を見せる「インターナショナルな雰囲気」のなかで、「豊かな国際感覚をもってさまざまな問題に取り組むりポートは読みごたえがあり、ややもすると上滑りに流れていく感のする『輝ク』の海外への関心をひきしめている」と評価している<sup>9</sup>。大石のサンパウロ体験と言説に注目した高橋大助は、ブラジルの日本人移民二世の聖一を主人公とした小説「蝸牛」とその改稿「鷺と蝸牛」を分析した<sup>10</sup>。高橋は、聖一を「記憶を彩るノスタルジーから放擲されて境界線上の存在であることを自覚した」「オルタナティブな世界を実現させる知性の獲得を予感」させる存在と解釈し、そこに「作家・大石千代子を重ね」た。他に小正路淑泰は、大正末期から昭和初年に大石の故郷・福岡県京都郡豊津村で鶴田知也、福田新生らとともに参加していた手書き回覧式の同人誌『村の我等』から、大石の文学的土壌を明らかにしている<sup>11</sup>。

以上のように、近年の研究では大石の1940年前後の作品<sup>12</sup>が主に取り上げ

5

早瀬晋三『「ベンゲット移民」の虚像と実像——近代日本・東南アジア関係史の一考察』同文館出版、1988年11月、4頁

6

菅聡子「〈女性作家〉と〈国民〉の交差するところ」、『女が国家を裏切るとき——女学生、一葉、吉屋信子』岩波書店、2011年1月、97頁

7

日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第一巻』日本近代文学館、1977年11月、241頁

8

渡辺澄子『負けない女の生き方 217の方法——明治・大正の女作家たち』博文館新社、2014年8月、312頁

9

尾形明子『「輝ク」の時代 長谷川時雨とその周辺』ドメス出版、1993年9月、44頁-49頁

10

高橋大助「境界に立つ知性——大石千代子のサンパウロ体験、『輝ク』と「蝸牛」」、『國學院雑誌』第121巻10号、2020年10月、17-18頁

11

小正路淑泰『堺利彦と葉山嘉樹 無産政党的社会運動と文化運動』論創社、2021年5月、215-217頁

12

『ベンゲット移民』を1939年に発表したのち、『創作集 山に生きる人々』（洛陽書院、1940年9月）、『交換船』（金星堂、1943年7月）などを刊行している。

られており、本稿もまた1939年刊行の『ベンゲット移民』を議論の中心におく。しかし同時に、大石の戦後の作品が一転して私小説的な趣を強め、「女」や「妻」として自己を幽閉する「家」の抑圧を描いていることにも目を配りたい。大石の「女」に対する意識を光源に、家父長的論理や植民主義の内部において書かれた『ベンゲット移民』の記述を再考し、「国民」であり「女」であるという立場から小説を書くことが、どのような表現を可能にしたのかを考察する。

## 2. 大石千代子がまなざす家父長制

1940年前後の大石は『女人藝術』や『輝ク』に作品や海外のリポートなどを寄せながら「大陸開拓文藝懇話会」に参加し、時局へ協力的な（ように見える）作品を発表していた<sup>13</sup>。その活躍の背景について、前出の高橋大助は近藤春夫という人物との関わりを指摘している。近藤春夫は大石も所属していた「大陸開拓文藝懇話会」のメンバーであり、彼は大石千代子について「閩秀移民文学作家の参加は、必ずや、他山の石として、大陸開拓文藝への交流的効果を期待し得る」<sup>14</sup>人材として評していた。高橋大助は『『輝ク』の周辺に存在し、外務省出身で拓務省に出入りする近藤は以前から大石を知っていたに違いない、「大石の「大陸開拓文芸懇話会」や「開拓文藝選書」への参加の道筋を近藤がつけたと見ても大過ない」と指摘する。しかし高橋も指摘したように、大石千代子自身は、自己へ寄せられる「期待」や大石の創作に「移民文学」という「レッテル」を簡単に貼る「文壇」に対し「警戒感を隠そうとはしない」<sup>15</sup>。大石は『創作集 山に生きる人々』の「創作ノート」に、

この十二三年の間、何べんか一二年づつ日本を留守にして帰つてきみると、その度に、文学の上に異変がきている。文学の異変ではなく、文壇の、或はジャーナリズムの主張の異変である。／移民文学といふ名称が悪いといふわけではない。簡単に、取扱はれる素材を見たゞけで、そこに貼りつけるレッテルが気になる。／文学の主張は常に真直ぐだ。選ぶ材料は何だつていゝわけである。（傍線は引用者による。以下同）

と語っている。彼女は、自分が「移民文学」の書き手として「レッテル」を貼られ受容される<sup>16</sup>ことへ疑義を呈すように「選ぶ素材は何だつていゝ」と述べるのである。

加えて、大石が「移民文学」の旗手と捉えられたきっかけともいえる、大石の夫・有山逸郎の存在は無視できない。1936年5月29日の「伯刺西爾時報（NOTICIAS DO BRASIL）」（伯刺西爾時報社）には、有山逸郎について「聖市総領事館の有山逸郎書記生は賜暇帰朝をなすことに決定」とあり、その後1937年、ダバオの領事館に約1年間勤務していた。有山の当時の肩書きである「書記生」は、正式には「公使館書記生」「領事館書記生」と称され、「外交官及領事

13

拙稿「反語をよぶ（フィリピン）と「移民」——大石千代子「山に生きる人々」論」、『繡』第32号、2020年3月、102頁～117頁

14

近藤春夫「大陸開拓文藝懇話会について」、『海を越えて』、1939年3月、26頁

15

高橋、「境界に立つ知性」、17頁

16

近藤春夫は「外交官夫人として、ブラジル在住七年余に及び」と紹介しており（近藤、「大陸開拓文藝懇話会について」26頁）、『輝ク』48号（1936年2月）では大石を囲んだ座談会「帰朝者を囲んで」が企画されている。大石が海外と日本を行き来する特異な視野を持った人物として認められていた。

館試験ニ合格」<sup>17</sup>した者しか任命されない「外交官」とは異なる<sup>18</sup>。この「書記生」の職務としては外交における要人の言葉の翻訳・通訳が主要なものであり、自由に自分自身の言葉で語ることは必要とされていなかった。また、外務省勤務の夫とともに実際に海外で見聞を得ていた大石は、近藤春夫や「大陸開拓文藝懇話会」といった人脈から作家としての立場を築いていったと考えられる。夫の職掌をきっかけとして作家としてのキャリアを積んだ大石自身も、夫の職掌に差し障ることは発表できなかつたと推察できる<sup>19</sup>。

大石の戦間期におけるこうした執筆活動について、大石自身がどのように考えていたのか、それを明瞭に示す資料はない。しかし、戦後に発表した短編小説「心焰」(『九州文学』第九七冊、1947年12月)の主人公は、大石自身と共通した設定で描かれており、大石の自画像とも思わせるものである。よって、敗戦後の私小説的作品の記述を探ることで、大石が作家としての自己をどのように評価していたのかを知る手がかりを得ることができるだろう<sup>20</sup>。

短編小説「心焰」は、アジア太平洋戦争開戦の前年まで夫の仕事の都合で海外で暮らした作家の主人公・水上直子が、娘とともに暮らしていた東京から夫の郷里へと転居を強いられるところから始まる。直子は夫の親戚や村との付き合いで疲弊し「一步も紙の上に」向かえず「ふかく執念<sup>しつこ</sup>く彼女を縛ってくる日本の「家」といふものの煩はしさ」を嘆いている。短編小説「心焰」における「水上直子」という名が「旧姓のまゝ名乗っているペンネーム」であることは、大石が「有山」を名乗らず「大石千代子」として書いてきたことと同様である。「心焰」の直子が、夫に「お前は俺の女房だよ、永井家の嫁だぞ。永井直子として生きるのが本当か、水上直子で生きるのが正当か」と、「水上直子」ではなく「永井直子」として生きるよう詰め寄られる場面もあるが、このペンネームにまつわる境遇のみならず、夫の郷里への引越しやその転居先の設定などが、作者である大石千代子のそれと重なるのである。

「心焰」の直子は、「戦争の間」に「自分のもの」としての小説を一篇も書いていなかったと、自作品を評価できないがゆえに今こそ「本当のものを書きたい」ともがいている。その姿は、大石の「戦争の間」の作品の数々が「取扱はれる素材」だけで「移民文学」として受容され、「自分のもの」と言い難かった姿と重なって見える。結局、小説「心焰」は、直子が夫の「家」に閉じ込められ自由に「書く」ことができないまま幕を閉じてしまうのだ。

戦後の主要文芸雑誌に発見できる大石の作品には、『新潮』1951年12月特大号「全国同人雑誌推薦小説特集」に掲載された短編小説「銀婚式」がある<sup>21</sup>。ここでも、元外交官の夫の郷里で「撲たれたり蹴られたり」したトラウマ的経験を回想しつづける佐和子という女性が主人公である。「妻としての金縛り」の経験のために、仮に離婚話ができたとしても「これぞ運命の転機なりと跳りあがる情熱さへ、それを人生のお茶番としか感じきれない」と自嘲する。そして、自分を「健康なあかるさ」を失った「卑屈な倫理の諦観」と責めて、自己嫌悪を繰り返していく。

17 巖松堂書店編集部編『外交官受験提要』巖松堂書店、1908年2月、9-12頁

18 有山逸郎は「書記生、のち二等通訳官」の「ノンキャリア」の経歴である(小正路、『塚利彦と葉山嘉樹』、215頁)。

19 海外勤務の夫を持つ女性は、「外国に在動中は(中略)妻は夫と同様の覚悟と働きを持たねばならない、「其重荷を負つて歩かねばならない」と言われた(小村欣一「外交官夫人へ」、『女性日本人』2巻5号、1921年5月、107-109頁)。

20 小説「心焰」の直子が「東京を去りかね」たのは、「彼女がものを書く仕事をもつていたゆゑに、それと縁を絶つこと」を「悲し」んだためでもある。戦後の大石も、総合雑誌・文芸雑誌にはほとんど現れなくなり、『九州文学』『隊商』といった九州地方の文学同人誌を拠点に活動する。また、『九州文学』や同人誌『隊商』の同人として再出発した大石は「隊商」の顧問格として同人・編集委員であった。(坂口博「九州を遠く離れて」、『叙説III 文学批評』17、2020年1月、63-73頁)

21 同人誌『隊商』の代表として「大石千代子」の名で掲載された作品。

以上の敗戦後の大石の執筆活動を踏まえれば、1940年前後の「移民文学」としての自作品について肯定的に受け止めていないと考えられよう。そして敗戦後の「心焔」や「銀婚式」といった私小説的な短編小説は、「日本の「家」といふものの煩わしさ」を告発し、「女」「妻」としての苦痛を叫ぶような作風へと傾いている。敗戦後の大石は、残存する家父長的社会のなかでの苦しみを作品へと昇華させていたのである。

そのように考えれば、『ベンゲット移民』における家父長制に肯定的な記述については、さらなる検討の余地がある。当時の大石が、先述の「大陸開拓文芸懇話会」などの人脈において時代の要請にそった表現を行なう環境にあったと捉え、時局的な表現のコードと大石の表現の距離を見ることも必要である。

実際、大石の『ベンゲット移民』における男性移民のホモソーシャルの秩序を支える家父長的論理は、昭和期の日本がフィリピンに移民・植民を送り永住させる対外膨張主義へとつながるものである<sup>22</sup>。その意味では、大石の『ベンゲット移民』における男性の日本人移民たちがフィリピンへの南進の先駆けとして英雄化されていることは、当時の南進論へじゅうぶんに寄与してしまうものである。

しかしながら本稿で重要視したいのは、『ベンゲット移民』に差し挟まれた、日本人の男性移民を英雄化する物語に傷をつけかねない記述である。具体的にいえば、それは『ベンゲット移民』における女性の日本人移民——1900年頃から海外に渡航し、公娼または私娼として働いたいわゆる「からゆきさん」の表象である<sup>23</sup>。

### 3. 『ベンゲット移民』における「からゆきさん」の饒舌

先述のように『ベンゲット移民』に関する先行研究は、男性移民の表象に顕著な「ナショナルイズム」の側面を強調しながら、女性の移民の表象を分析するものはなかった。だが、ベンゲットに渡航した娼婦のおりんは作品の中盤から随所に登場し、その独白に2ページ分が割かれるなど、決して無視できる存在ではない。

まず指摘しておきたいのは、同時代の「ベンゲット移民」に関する言説群のなかでは海外での娼婦を描くこと自体が特異であったという点である。大石の描く「からゆきさん」の同時代的な意味を確認するため、まず、どのようにして明治期の「ベンゲット移民」が昭和期に書き直されたのか、周辺の同時代言説を確認したい。

明治期、フィリピンのベンゲット道路工事の労働力として日本人が出稼ぎに赴いていったことは早瀬晋三が精緻に論じており、1930年代に「ベンゲット移民」に関する言説が多く見られるようになったのは「大東亜共栄圏構想のなかで、日本民族の優秀さを示す格好の題材として利用された」ため、と指摘する<sup>24</sup>。

22

島崎藤村と長谷川時雨が『ベンゲット移民』に寄せた序文では、それぞれ「移民の生活そのものが新しい開拓である」、「異境にまつられぬ「人柱」となった先行移民の一つの記録」とある。このように、本作品が描いた明治期の「ベンゲット移民」は1930年以降に急増したフィリピンへの移殖民の「先行移民」として位置づけられている。

23

「からゆきさん」という用語が一般的になったのは1970年代であり、『ベンゲット移民』の本文に「からゆきさん」という言葉はない。しかし、嶽本新奈が「海外に〈出稼ぎ〉へ行き、売春を経営的営為としていた女性」を「からゆきさん」と定義したことを踏まえ、本稿もその意味で「からゆきさん」という用語を採用した（『「からゆきさん」——海外〈出稼ぎ〉女性の近代』共栄書房、2015年5月、19頁）。

24

早瀬、『「ベンゲット移民」の虚像と実像』、258頁。また、「明治三十七年七月一日付在マニラ帝国領事館報告には、四七四人のフィリピン在住の日本人女性が記録され」、「うち三〇六人が「酌婦」と分類されている「からゆきさん」であり、ベンゲット州にも一戸六人の「酌婦」が記録されている」（129頁）。

大石がどのようにして「ベンゲット移民」に関する情報を得たのかは確定できないが<sup>25</sup>、本文には明らかに同時代資料に依拠している箇所が複数ある<sup>26</sup>ため、大石が同時代の刊行物を参照していたことはほぼ間違いない。1939年の『ベンゲット移民』発表以前、大石が手にすることのできたであろう「ベンゲット移民」に関する日本語の資料は、渡辺薫『比律賓在留邦人商業発達史』（南洋協会、1935年12月）、入江寅次『邦人海外発展史』（移民問題研究会、1938年1月）、蒲原廣二『ダバオ邦人開拓史』（日比新聞社、1938年4月）があげられる。早瀬によれば入江の『邦人海外発展史』と蒲原の『ダバオ邦人開拓史』が、当時の「ベンゲット移民」の英雄的なイメージを固定化させ、一般的な認識として広めた資料であった。大石の『ベンゲット移民』に挿入されたエピソードや移民たちの間で流行した歌なども、これらの資料が典拠になっていると思われる。

しかし、こうした同時代資料では、ベンゲット道路工事における「からゆきさん」についての言及は意図的に削除されていた。具体的に言えば、入江の『邦人海外発展史』は、『移民調査報告 第六』（外務省通商局、1911年3月）に記載された元マニラ領事館代表代理の岩谷讓吉による報告<sup>27</sup>に基づいているが、この報告書が印刷・流布されるにあたり、いくつかの項目が原本から削除されている<sup>28</sup>。その一つとして、「醜業婦」の存在が報告書から抹消されているのである。早瀬はその理由について「「からゆきさん」と呼ばれた売春婦やそれにまつわるならず者集団」は「国際的に躍進する日本という「国家」に属する「日本人の対面を穢す存在として「日本人労働者の立場を悪く」するものものだったことを挙げている。入江の資料のみならず他の同時代資料においても、当時のベンゲット地方における日本人の「からゆきさん」は消されたままであった。したがって、大石の『ベンゲット移民』における「からゆきさん」の登場は、「ベンゲット移民」を立派に描くことで南進論を肯定し「国家」を高揚する、という時代の要請に寄与する作品の内部に、不穏な響きを放つものであったのだ。

以上の背景も踏まえて、作品の表現を分析していきたい。作品内に登場するベンゲット道路工事に向かう男たちにとってのジェンダー規範は単純である。「男なら男らしく、覚悟を決めんか、いつ迄も女の腐つた様な事いふな」、「気の小さい男やな、女子の様な弱つたらしい事いふな」のように、工事に対する弱気な状態を「女子の様」と規定し、それを乗り越えて「男らし」さを獲得するというレトリックを用いる。ここに弱い女／強い男という単純な構図が築かれているが、『ベンゲット移民』に登場する女性の描写において、そのような弱さが特筆されているとは言いにくい。作品における女性は、「葉煙草やボンガを噛んで、赤い唾を所かまはずベツへ」と吐き散らかす「不潔極まる」「比律賓女達」、そしてベンゲットの「飲屋」で給仕をする日本人の「女達」すなわち「からゆきさん」と呼ばれる女性たちである。

作品の舞台であるフィリピン・ベンゲットにも、移民の増加にしたがって労働者たちのための「飲屋」ができていた。そこで給仕をしていた「女達」は、「大つぴらには、官憲がやかましくて許されない商売ながら、表向きは給仕女と

25

『ベンゲット移民』に所収の長谷川時雨  
が寄せた「序」には、大石が「工事を為  
し遂げた移民生存者からのききとり」  
を得たことが示されている。実際にベ  
ンゲット道路工事に従事した人物から  
話を聞いたとすれば、1937年から夫の  
ダバオへの赴任に随行していた際に、  
ダバオへ移動した元「ベンゲット移民」  
から直接話を聞く機会もあったと推察  
できる。日本人によるダバオの開拓は、  
ベンゲット工事を終えた日本人がダバ  
オに渡ったことに始まったとされてい  
る（早瀬、『「ベンゲット移民」の虚像と  
実像』、186頁）。

26

例えば、作品内で移民たちが口ずさむ  
「サノサ節」の歌詞は渡辺薫『比律賓在  
留邦人商業発達史』88-89頁を初め他  
の同時代資料にも見られ、本文の「比  
律賓女達」が「葉煙草やボンガを噛んで、  
赤い唾を所かまはずベツへ」と吐き散  
らした」とほぼ同じ記述が、蒲原廣二『ダ  
バオ邦人開拓史』17頁に確認できる。

27

岩谷讓吉「比律賓群島移民事情」、『マ  
ニラ」領事館報告書』外交史料館文書六  
門一類6-59、1910年3月。未刊行だが、  
外務省外交史料館、国立公文書館アジア  
歴史歴史資料センターで原報告書の  
閲覧が可能。

28

前掲「比律賓群島移民事情」から削除さ  
れたのは、主に軍事関係の機密事項、「醜  
業婦」に関わる記述、その他日本の体面  
を穢しかねない記述である（早瀬、『ベ  
ンゲット移民』の虚像と実像』、207頁）。

いふ事にしてあつて、裏では、皆客の相手になる女達」であった。そこで彼女たちについては、作品に次のような差別的発言が書き込まれている。

「男心と、人の心とどう違ふかや?! 人といふなあ、皆男の事ぞう。女は人であつた例がねえや、女といふものは、皆人間ぢやなうて三間位ひのものぢや、みてみんな、あのおりんを人間ぢふ奴があつたら、おん目にぶら下りてい。あれや三間を通り越して畜生の類ぢやぞう。」

「からゆきさん」のおりんは「人間」としての価値を剥奪され、ベンゲット道路建設における男性コミュニティの外部に置かれるのみである。また、主人公の貞吉から「汚ねえ、側に寄るな!」と言われたり「白粉の匂ひと、酒に蒸れた女の体臭」がことさらに描写されたり、「比律賓女達」と同様、不潔さが強調される。

また、おりんはなかでも「年増女」で、「酒臭い息」や「べちやんこの鼻の上に、白粉と汗がびつしりと酒に蒸されて玉になつてゐる」など、ほかの娼婦の「むちへと肉づきのい、若い女」と比較したとき、欲望の対象としての価値が相対的に低くなるように書かれている。興味深いのは、「若い女」が「あんまりものも云はず」「静かに酒を注ぐ様子とは異なり、おりんは饒舌に語る点である。おりんは、貞吉に「汚ねえ、側に寄るな!」と言われても「汚いとはよういふたね!」と言い返し「お前だつて年頃ぢやろ、女切れのほしくない頃でもあるめい、弱い所をつゝかれて、あはてやがつてさ」と欲望を挑発する。このおりんの言葉は、貞吉の「彼を襲つてくる激しく呪はしい肉体の燃焼」と「堪え難い大きな苦惱」を呼びおこし、貞吉は、「呪はしい肉体の燃焼」として現れた「大きな苦惱——性への欲望と言ひ換えられる——を馴致しようともがくのである。

また、男性の日本人移民たちはおりんを「彼奴あサンタマリア様ぢや。妄者を救ひ給ふ有難え菩薩観音ぢや」と神聖化しつつ揶揄するレトリックによっても、男性的コミュニティの外部におりんを放擲する。越智和弘によれば、「男たちの近代メカニズム」は、女を「機械のごとく効率よく機能するロボット」または「男の欲望に安全なかたちで応えるマヌカン＝娼婦」という二種類の「理想型」に収斂させる<sup>29</sup>。ベンゲットの「女達」は後者の「安全な」娼婦、つまりベンゲット道路工事に関わる男性の秩序を侵害することなく欲望に応える、無害な娼婦と言える。しかしながらおりんは、「これでも、此の汚い体が入用で、お拝倒すおつさんばつかりなんだよ。入る所に行けば、これでもサンタマリア様ぢや、私や、後光の射すサンタマリア様だよ」と言い、自らを「玩具」として客体化する男性的視線を引用するのである。

こうしたおりんの饒舌さは、おりんが男たちに欲望される客体なのか、それともおりん自身が男を欲望させる主体なのかという判別を曖昧にするもので、おりんを一方的に対象化する視線にひずみを生じさせている。おりんに挑発的な言葉を向けられた貞吉は、おりんの言うとおりに性的な欲望を抱いてしまうことに対して苛立っている。おりんは、男性によるコントロールから逸脱し、その支配構造を揺るがす有害な女性なのである。

29

越智和弘「欲望する母性(美と文化)」、『言語文化研究叢書』2、11巻26号、2003年3月、20頁

また、おりんは貞吉に対する特別な「彼女の愛情」を持つのであるが、その「愛情」は作品内の男性コミュニティを攪乱する作用をもたらしている。貞吉とともにベンゲットへ渡った一人である安中は、おりんは貞吉に好意を持っていると知り「何か余程考え込める」貞吉の様子をみて不安になり、おりんを男同士のコミュニティのみならず「人」からも疎外しようと躍起になる。男の領域を侵犯しない無害な娼婦であるはずのおりんが、その「手管」によって貞吉を誘惑し、不安定にさせていることに焦燥するのである<sup>30</sup>。

そうした不安を抱えた安中の、以下の思い煩いは、女性嫌悪とホモソーシャルの確立だけではないように見えてくる。

安中は苛々として怒鳴りながら、胸の中は、その事よりも、貞吉の事についていになり、何か落ちつけなくて堪らなかつた。(中略)／貞吉の子供っぽい愛嬌や、小生意気な荒らつばさに心を惹かれ、今では、彼を肉親の弟か自分の子供の様にしか考えられない安中としては、貞吉を引きづり廻す大きな力の正体が何であるか、それだけが何としてもはつきり知りたい。(中略)／安中には、特にどうといふでもないのに、安中は彼を親身に近く感じてゐるのは不思議であつた。

安中は、男性同士の強固な関係を、とくに貞吉との間に結ぼうとする。イヴ・セジウィックにしたがえば、ホモソーシャルな男性同士の関係は女性嫌悪(ミソジニー)と同時に男性同士のホモエロティックな欲望をも嫌悪し、厳しく排除する(ホモフォビア)<sup>31</sup>。しかし、Mark Lilyが兄弟愛・身体的愛情表現・男性間の性欲望は各々が別個にある状態ではないと指摘した通り<sup>32</sup>、貞吉を「肉親の弟か自分の子供の様に」「愛さずには暮らせな」と言う安中の心理描写は、ホモエロティックな表現として読む余地もあるだろう。

おりんは「玩具」として労働者の男たちに客体化され続ける一方、「女」としての性を利用して挑発し、貞吉を混乱させていく。それによって、おりんは男たち全員にとって等しく無害な存在ではなくなる。安中は、おりんがもたらしたかに見える混乱から貞吉を救い、堅牢なホモソーシャルを守ろうとするが、その身振りはかえってホモエロティックさを呈する。このようにして、男性の日本人移民たちのホモソーシャルが揺らぎを見せるのである。

#### 4. 「国民」の物語に結像しない「女」

しかしながら、おりんの饒舌さによって脅かされた支配的な男性性は、また別の力学、すなわち死者を「国の為」の「戦死者」として意味づけることによって回復されてしまう。

日露戦争開戦を知った貞吉は、「祖国日本」に「若者の血を湧き立たせる国難が迫ってきて」いるのに「其処へ行く事さへ出来ず」「野垂れ死」のうとしている

30

この貞吉の不安定な様子は、貞吉が工事からの脱走を企てていたことが要因であったのちに判明する。しかしここでは、貞吉を混乱させる要素として安中が「おりんの素振りから考え出した貞吉の此の頃の姿は、彼には不可解で、不安で堪らなかつた」と、おりんの存在を念頭に置いていることを重要視したい。

31

イヴ・セジウィック、『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗・亀澤美由紀訳、名古屋大学出版会、2001年2月、1-31頁

32

Mark Lily, *Gay Men's Literature in the Twentieth Century* (New York University Press, 1993), p.66には、以下のようにある。

*A further problem is that different kinds of love are often expressed in the poetry so similarly, that it is by no means easy to distinguish them. Conventions of expression sometimes make brotherly affection, physical tenderness and sexual desire all sound the same.*



ことに咽び泣く。他の仲間も「国の為に戦死すると、こげな所で、人も知らん山の中で、あげな惨たらしい穴の中には入るのと、ほんに大きな違ひぢや」と、「華々しい「戦死」と、自らの「野垂れ死」を対置し、「何故に、何の為に、生死を賭して、此の一隊の移民群は地蟻の様に、赤い異国の土を掘り返へし、掘り上げねばならないのであらう」と、その目的さえ見失ってしまう。ところが、「国の為」の「戦死」とベンゲットでの「野垂れ死」の落差は、「それだけの人柱があつたけんこそ、此処が出来たといふ事あ、事あちがふても、日本の為から云や、戦争に行つて死ぬのと、(中略)一つも変らん事ぢや」と、それぞれの死の意味を同一化する論理によって解消される。「何百人の人柱は、皆、勲章こそ貰はんばつて、立派な戦死ぢや」——つまり、ベンゲット道路工事での犠牲を「国の為」、「日本の為」の死として解釈することで、「戦死」と同様の意味を獲得したのである。

高橋哲哉は「戦死者の「追悼」」について、「その「追悼」が「国のために」死んだ兵士に「感謝と敬意」を捧げ、彼らを国民の模範へと高めることによって、新たな戦争へ国民を準備していく顕彰行為となる」と述べる<sup>33</sup>。工事での犠牲を「戦死」と重ねることにより、移民たちは自らも「国民の模範」となり得る論理を獲得する。そして、残された者で道路を完成させることが、死者を「追悼」し、「国民」「日本人」として顕彰する行為として意味を帯びていくのである。

それゆえに、ベンゲットで働く男たちにとってはどのように生き、どのように死ぬかという問題が重要視される。道路工事に果敢に挑んで犠牲になった男たちの一方で、富次郎という人物はベンゲットに到着後すぐに赤痢に罹り、あっけなく死んでしまう。作品中でも富次郎が発した言葉はほぼ皆無である。その死に対して貞吉は、早々に病気に罹ったとしても、せめてそれを「呪ふか罵つてでもくれなかつたか」「生意地」を見せてくれなかつたか、と富次郎への憤りを表明する。貞吉にとっては、富次郎の死が「日本人」として生きようとした先にある犠牲でないこと、すなわち、ただの死者であることが許せないのである。こうした富次郎のありようが「女らし」く「生意地のない富次郎」と男性移民たちに評されることから、彼らにとっては「日本人」として生をまっとうすることが「男らしさ」であり、そうでない場合は「女らしさ」として非難の対象となる。ここには、どのようなかたちであれ「日本人らしい人間らしい生きようとした者の死を肯定する論理がある。

このように移民の男性コミュニティは、富次郎に表象される、生きることへの意志を示さずただ死んだ「女らし」い男を、「人間」や「日本人」として認めない。その一方で、対照的に「国民」(「日本人」)がすなわち「人間」であり、それは「男」である、という図式を完成させていくのである。だからこそ、ベンゲット道路の完成に際して生き残った移民たちによって建設された「白く美しい」「先亡同胞諸霊菩提塔」は、「国民」として彼らを顕彰する象徴であると同時に、そこに男性性のイメージも強く刻印されていることを見逃してはならない。

このように男性移民たちは、「国難」に立ち向かう「国民」という自己規定や、

33

高橋哲哉『靖国問題』ちくま新書、2005年  
4月、210頁

それにとまなう犠牲を「戦死」と意味づけることによって男性性を獲得する。それに対しておりんは、「戦争ぢや、戦争ぢやといふても、男のする事。私共女子は、知つたこつちやない」と、「戦争」という男の領域を自らと無関係なものとしてはねのける。つまり、おりんは自ら「国民」という共同体の外部に居場所を見出しているのである。

ここで、「醜業婦」とされた女性たちと「国民」という共同体の関係がどのようなであったのかを確認したい。嶽本新奈によれば、「からゆきさん」の数が急増したのは1900年前後である。当時は、国内での南進論の高まりとともに海外移民と移住が奨励されはじめ、日本政府は「対外膨張には日本人女性による性的慰安が必要」とし、日本国内から海外へと娼婦を積極的に移動させた<sup>34</sup>。日露戦争期には、「国民」はみな「天皇の赤子」であるという思想の広がりにより、娼婦もまた「国民」の枠内に含まれるのか、枠外に放擲すべきなのかという議論が起こる。結果的に、近代家族制度が強固なものとなるなかで娼婦は「健全さを損なうゆえに「国民」から「放逐」されるべき」として排除されていった<sup>35</sup>。海外において娼婦として働いた女性たちもまた、海外で売春行為をする汚れた「醜業婦」であるため、「国民」の枠外へ排除されていた。嶽本はそうした女性たちを「家」の抑圧によって社会の底辺へ位置づけられた存在」と述べている。他方で、「国家と緊密な関係を結ぶ「近代家族」を形成する「健全」な「日本婦人」、すなわち妻や母として位置づけられた女性たちは「国民」として包摂されていった<sup>36</sup>。つまり、女性は家父長的論理によって「国民」の枠の内外に振り分けられていたのである。

この論理は、「母」「妻」としての女性にも言及する『ベンゲット移民』の記述においても指摘できる。貞吉は「ぼく／＼とした砂地の畑に、母親がせつせと茄子をもいでゐる」姿や、母が「白い手拭の中の、菌の抜けた口をいつばいに広げて笑ふ」様子を思い出して慰められる。また安中も、「俺が嬢は、あげん腰の太うはなか。もちいつと、すらりと高うて、肉づきもいゝつちや！」と自らの「妻」を想起する。

以上のように、家父長的支配構造を侵害しない「母」「妻」としての女性は男性コミュニティを支える肯定的な存在として表象されているが、重要なのは、「国民」としての移民のコミュニティの内部において、覇権的な男性移民の声しか描かれなないということである。「国民」内部にある存在として肯定的に描かれる「母」や「妻」の言葉が、作品に描かれることは一度もなく、また「女らしく」「生意地のない」富次郎の声もまた、序盤から登場しているにもかかわらず描かれなない(例外は、富次郎が死ぬ間際に発した「おつ母——」という言葉のみである)。「国民」の境界内部は、覇権的な男性の言葉のみで満たされている。それゆえに、「日本人」や「国民」の範疇から放擲されたおりんは、「国民」の外部にあるからこそ饒舌でいられたのではないだろうか。男性的秩序とホモソーシャルを危うくするおりんの言葉は、「国民」の外部にいるがゆえに発せられていると見ることができよう。

34  
嶽本、『「からゆきさん」』、79-95頁

35  
出征軍人の慰問と軍人遺家族の援護を目的として1901年に設立された愛国婦人会は、設立当初から海外の日本人娼婦を「均しく皇国一般の民」となるべき「息子」を産む役割を担う女性」として入会させようと働きかけていた。それに対し『婦女新聞』は、「品位ある婦人が「醜業婦」と同一団体に属すこと」に猛烈に反発し、「日本婦人」の信用がなくなってしまふと主張した。結局愛国婦人会も『婦女新聞』の論調に妥協して、娼婦を排除していくことにつながった(前掲、116-138頁)。

36  
前掲、135頁

ベンゲットでの犠牲を「国家」のための「戦死」と重ね、「先亡同胞諸霊菩提塔」を建設するところで物語が幕を閉じるように、作品は日本人の男性移民の物語として像を結ぶ。ゆえに、従来の先行研究が「ナショナリズム」を見出したことに異論はないが、しかしその結末においておりんがどこかへ消えてしまっていることにもまた注目すべきである。全255ページで完結する物語において217ページまで随所に登場していたおりんは、「やつたナ、こん畜生、何の恨みがあつて、人をひどい目にあはせる。」という言葉を最後に一切登場しない。『ベンゲット移民』が「国民」の物語として結像していくとき、おりんの居場所はそこに用意されていないのである。このおりんの不在は、「国民」という共同体を外部から浮き彫りにしていると言えるだろう。

大石千代子の『ベンゲット移民』は、女性を「国民」の内部の「健全」な「日本婦人」として啓蒙的に表象するのではなく、むしろ「国民」の外におかれた「からゆきさん」のおりんを饒舌な主体として描くことに紙幅を割く。その結果、『ベンゲット移民』の物語が男性移民を「国民」として英雄化すればするほど、その物語に与しないおりんが存在が不自然なものとなる。かくして、「国家」のために尊い犠牲を払った「ベンゲット移民」像に傷をつけるとして、同時代資料から消去されていた「からゆきさん」は、小説『ベンゲット移民』において、「国民」という共同体の抑圧的男性性を現前化・対象化する存在として声を発しているのだ。

## 5. 「からゆきさん」に託したもの

最後に、同時代においてフィリピンが舞台とされたことの意味を考察し、それを踏まえ、なぜ大石が「からゆきさん」を饒舌な主体として描いたのかについて検討し、本稿の総括としたい。

「移民」の位置づけは渡航先や時期によっても異なる。早瀬は、明治期に海外に渡航した日本人を二つに分類する。まず第一の集団を「満州、台湾などへの帝国主義的征服・植民へとつながっていった」「明治一〇年代以降増大する朝鮮への商業的移民」で、「日本という国家の援助のもとに（中略）国家の征服的手段の一環として利用された植民」と位置づける。そして第二の集団を「ハワイ、アメリカ合衆国、オーストラリア、カナダ」といった「欧米帝国主義権力が及ぶ地域へ」の移民で、「プランテーション労働や漁業を中心とした」労働者として第一の集団と相対化した<sup>37</sup>。「ベンゲット移民」のような「フィリピンへの渡航者」は、フィリピンが「アメリカ合衆国支配下の土地であったことから、第二の集団」に属すると言える。

如上の見解によれば、明治期にベンゲット道路工事に従事した移民たちは、序文が位置づけたような帝国主義的征服・植民へとつながった存在ではなく、「アメリカ合衆国の支配下」における賃金労働者に含まれる。したがって、大石

37

早瀬、「『ベンゲット移民』の虚像と実像」、30頁

の『ベンゲット移民』は、フィリピンで欧米帝国主義に従属する「アジアの移民」を、フィリピンに進出する手がかりとなった「皇国の移民」として置き直すこととなった<sup>38</sup>。その点において、物語内時間である1903年(明治36年)と『ベンゲット移民』が出版された1939年(昭和14年)の段階で、東南アジア諸国のなかで唯一、アメリカの植民地であったフィリピンが舞台となっていることは重要な意味を持つ。アメリカに従属した日本人労働者をアジアの「植民」の先駆者として位置づけ直すためには、アメリカが所有する客体——つまり、フィリピンという土地——を、自らの所有物として意味づけなければならない。フィリピンへの南進を謳う時局下で本作品は、アメリカという帝国主体に対抗する日本「国民」の男性性を、フィリピンへのコロニアルな視線を媒介にして形成しているのである。

こうして、大石千代子における「国民」／「女」として書くことをめぐる問題は、大石にとってのフィリピンという題材の意味を問うことへと導かれる。大石はフィリピンを舞台としたことで、アメリカへの対抗と南進論の高揚という時局へ直接的に貢献することとなり、「文壇」<sup>39</sup>へ媚を売る結果となった。それが功を奏したのか、本作品は芥川賞予選候補になっている。しかしすでに述べたように、大石はこのような「文壇」へ懐疑を表明していた。小説『ベンゲット移民』における「国民」の境界の内部では、覇権的男性による言葉のみがあふれていたが、「国民」と「女」のジレンマを抱え込んだ大石にとっては、自らの仕事の舞台である「文壇」もまた、そのような空間に思われたかもしれない。

作中のおりんは「国民」の外部へ放擲された女性である一方で、作者である大石は、外務省勤務の夫を支えつつ「移民文学」を書くという仕事を割り振られた「国民」の範疇にいる。この点で、「国民」の外／内という立場の大きな差異がおりんと大石の間に認められる。しかし、『ベンゲット移民』におけるおりんが「戦争ぢや、戦争ぢやといふても、男のする事。私共女子は、知つたこつぢやない」と、「私共女子」という共同性を言明していることは注目に値しよう。このおりんの発言は「戦争」「戦死」を媒介に生成される「国民」の物語が、あくまでも限定的なものであることを示している。作品の表現に基づけば、「私共女子」は「からゆきさん」だけでなく「妻」や「母」としての女性や、「女らし」として非難された富次郎までも内包しうる言葉であり、大石自身も例外ではない。おりんの饒舌な言葉には、「国民」の男性的秩序の内部において「自分のもの」を書けないという大石千代子の苦悶を表現する、ごくわずかな望みが託されていたのだ。

※本文の引用は大石千代子『ベンゲット移民』(岡倉書房、1939年9月)に拠る。

※本稿はJSPS科学研究費補助金(特別研究員奨励費・課題番号21J20685)の成果の一部である。

38

この点は大石の作品だけではなく、「ベンゲット移民」を主題とした他作品、例えば織田作之助『わが町』(錦城出版社、1943年4月)なども含めて検討されるべきである。

39

大石千代子「創作ノート」、『山に生きる人々』洛陽書院、1940年9月、342頁